

# 論文

## 「貫之の梅」考

### ―百人一首の近世的展開

大内 瑞 恵

はじめに

紀貫之は『古今和歌集』の撰者の一人、『土佐日記』の作者、三十六歌仙の一人として知られる平安時代の歌人である。紀貫之の「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香にほにける」という歌は、『古今和歌集』(巻第一 春歌上四二、以下『古今集』とする)に入集しているが、『百人一首』に入ったことにより広く知られた歌と言えるだろう。

ところで、享保十四年(一七二九)に刊行された狂歌集『家つと』に貫之の歌を踏まえた狂歌が入集している。

梅

はつせ山小池の寺中より貫之の梅三枝(へた)給り歌を  
とありければ

梅はいかゝ思ふもしらず御懇意は初瀬山々香に匂ひけり

長谷寺より「貫之の梅」三枝をいただき、「歌を(狂歌を詠んでください)」とあったのでということ詠まれた狂歌である。

この「貫之の梅」は現在も長谷寺にある。しかし、貫之が詠んだ「ふるさは」は長谷寺参詣の途中で泊まる旧都(奈良)であろうと近年論じられており、稿者もそう思う。

つまり、貫之歌の解釈には時代的変遷があり、近世においては、長谷寺の「貫之の梅」という名所が成立していたということである。

『百人一首』を読解するときには、次の視点を考える必要があるう。

- ① 原作者はどのような情況・意図で歌を詠んだのか。
  - ② 勅撰集においてどのように解釈されたのか。
  - ③ 定家(鎌倉初期)はどのような解釈で和歌・歌人を撰んだのか。
- 島津忠夫氏の『新版 百人一首』は定家の解釈に重点をおいた注

釈書である。そのはしがきには次のように記される。

『百人一首』の撰者が、古来幾変転化の後、今日では、解説でも触れるように、藤原定家と見て、ほぼ誤りないものとされるにいたっているが、本書では、その新しい定説の上にならって、定家撰という立場から、現代語訳も鑑賞も施したことである。原作者の詠作意図よりは、定家がどう解釈し、どう評価していたかに重点を置くことするのである。従って通説と異なる点も多く、時には定家の誤解と見られる点もそのままに現代語訳を施しているが、それらは、すべて語釈または参考でその旨をことわっておいたので特に一首取り出してよまれる場合には注意してほしい。

「原作者の詠作意図」と「定家」の視点が必ずしも同じではないという指摘は、近世における注釈書のありようにも通じることである。

本稿は、その上で近世における紀貫之とその「人はいさ」歌がどのように享受されたかを「貫之の梅」から見ようというものである。

### 「ふるさつ」とは

まず、紀貫之の「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香にほひける」とはどういう歌であるのか。

#### 『古今集』<sup>(注2)</sup> 第一 春歌上

くらぶ山にてよめる

つらゆき

三九 梅花にほふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞ有りけ

る

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をとてよめる

みつね

四〇 月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける

はるのよ梅花をよめる

四一 春の夜のみはあやなし梅花色こそ見えぬかやはかくる

はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしくや  
どらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のある  
じかくさだかなむやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる

つらゆき

四二 人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔のかにほひける

水のほとりに梅花さけりけるをよめる

伊勢

四三 春ごとにながるる河を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ

「梅花にほふ」「それとも見えず梅花かをたづねて」「色こそ見えぬかやはかくる」と、〈梅の花はよく見えずとも香りわかる〉歌が三首続き、四二番の「花ぞ昔のかにほひける」という並びになっている。

この歌は、初瀬(長谷寺)に参詣するたびに、泊まっていた人の家に長らく泊まらず、しばらくして行ったところ、その家の主人が「このようにしつかり宿はありますよ」と言いかけましたので、そこにあつた梅の花を折って、「人(あなたの)の心はさあわかりませんが、古里は、この宿の梅は昔のまま変わらせずに香り咲いてい

ますよ」と詠んだというもの。

次の伊勢の歌は、水辺に咲く梅の花を詠んだ歌で、毎年春が来るたびに、流れに映る花の影を、本当の花かと思ひ手折ろうとしてもできず、袖だけが濡れてしまうのだろうかというもの。香ではなく「春ごと」と毎年の春を詠む歌であり、「はつせにまうづるごとに」「ふるさととは花ぞ昔の」に続いて時間を意識させる配置である。

『貫之集』<sup>(注3)</sup>では、家の主の返歌が残る。

むかしはせにまうづとてやどりしたりし人の、久しう  
よらでいきたりければ、たまさかになむ人の家はあ  
るといひ出したりしかば、そこなりしむめの花ををりて  
いとて

八一四 人はいさ心もしらず故郷の花ぞむかしのかにほひける  
返し

八一五 花だにもおなじ心に咲くものをうゑたる人の心しらなん  
久しく訪れなかつたことを言われて「人(あなた)の心はさあわ  
かりませんが、古里は、この宿の梅は昔のまま変わらずに香り咲  
いていますよ」と答えた貫之に対して、「花ですら昔と同じに咲く  
のに、どうしてその変わらない花を植えた人(わたし)の心を知ら  
ないのでしよう」と宿の主は返したということである。

さて、貫之の歌に出る「ふるさと」とはどこか。

井上宗雄氏は「作者が久しぶりに大和(奈良県)の初瀬にある長  
谷寺へ参った折、かつてのなじみの家を訪れると」「ふるさとの自  
然は美しい、という初瀬へのなつかしさを秘めた、初瀬の人への

あいさつがこめられているとも見られよう」と記す。この歌につ  
いて、井上氏が着目したところは詞書に記された場をはずしてみ  
た時の「悠久の自然と有限な人間とを対比する心が生まれ、作者  
の懐旧の情は深い詠嘆をともなつて春の日にたゆとうてゆく……  
(中略)中世の人々が心に抱いた王朝の美の映像」である。初瀬に  
こだわらず、「また「ふるさと」は、初瀬に行く途次の「奈良」の  
中宿りとも(吉海・島津著参照)」と鑑賞の末尾に記されている。

島津忠夫氏は「ふるさと」を奈良とする。「諸注、昔なじみの所  
と解して、長谷を考えてきたが、平安の都人全体にとつての「ふ  
るさと」は「古りにし奈良の都」であった」として、渡辺輝道氏<sup>(注7)</sup>  
と吉海直人氏の論をあげる。

ならのみかどの御うた

九〇 ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はき  
けり

渡辺氏は、『古今集』(春下・平城天皇)のこの歌を提示しつつ次  
のようにまとめる。

平城天皇歌が和歌史に与えた影響は大きい。そしてさらに  
その奥には、

あをによしならの都は咲く花のほふがごとく今盛りな  
り

(万葉集・卷三・三三三・小野老朝臣)

を代表とする「咲く花のほふ」ならの都歌群が控えてい  
るのである。

紀貫之の「人はいさ」歌は、その系列の中で捉え直してみ

るべきではないかと考える。

吉海氏は

「故郷」について、『古今集』四二番の詞書では単になじみの宿とあるだけで、必ずしも初瀬に限定できるものではない。歌の内容からすれば「故郷・花・匂ふ」は、むしろ奈良の都のイメージである(屏風歌の可能性もある)。ところが伝記考証ではこれを一等資料にして、初瀬を貫之の生まれ育った故郷と積極的に認定しているのである。

とする。

従来、「人はいさ」歌の「ふるさと」は初瀬(長谷寺)と解釈されてきたが、近年の研究により、初瀬に行く途次の「奈良」と理解すべきであろう。

しかし、当該歌の近世における受容を考えるためには、従前の解釈を確認すべきであろう。どのようにして、貫之と初瀬のイメージがつながっていったのか。

### 『百人一首』の変遷

簡単に整理しておこう。

『百人一首』は、鎌倉時代に成立し、室町時代以降徐々に広まっていた。『百人一首』注釈書の最初期のものと目される『百人一首宗祇抄』(文明十年(一四七八)奥書)は奥書によると連歌師宗祇が東常縁から聞いた教えをもとに記したという。

やがて江戸時代初期には後陽成院が『百人一首抄』を著し、寛文元年(一六六一)に後水尾院は『百人一首』の講義を行った。こ

の講義の記録が『百人一首御講釈聞書』であり、講義を聴聞した後西院や飛鳥井雅章などにより作られた聞書はそれぞれの門人に書写されていった。堂上における古今伝受の一環に『百人一首』は組み込まれている。

一方、地下では延宝六年(二六七八)細川幽斎の『百人一首抄(幽斎抄)』に菱川師宣の挿絵を付した『百人一首像讚抄』が刊行され、天和三年(一六八三)、元禄五年(一六九二)と板を重ねて広まった。以降、契沖『百人一首改観抄』、賀茂真淵『うひまなび』など国学者らによる注釈が行われていく。

では、貫之歌はどのように記されたのか。

天理図書館蔵『百人一首聞書』<sup>注8)</sup>

紀貫之(先祖不見。木工頭土佐守御書所領(預)。

人は伊佐心も知す古郷の花そ昔のかに、ほひける

哥の面までには其心めつらしからず。事書二曰初瀬に詣ける度ことにやとり馴たる家に久にまからである時にまかりければあるし「かくさたかになむ宿りはあり」と云ければそこにありける梅を折て読りと云々。此主の言心はやとりなれたる所に久しくこねは根(恨)て人の心こそ替たれ共我はへんせす今迄待たると云詞をうちすてさたかにしてありといへとも人の心はいさしらす此梅の花は昔のことくに向と前の詞に門答したる所実に粉骨の作也。はつせを古郷と云事は推略天王の都なれば也。この花は梅なり。

まず、『古今集』の詞書を記し、歌の意味を記す。贈答歌であるところを「粉骨の作」とみるところは、この歌が当意即妙のやり

とりであることを評価したものである。「はつせを古郷と云事は推略天王の都なれば也。」の「推略天王」とは「雄略天皇」のこと、泊瀬朝倉宮は初瀬と推定されたことによる。

京都大学中院文庫本『百人一首聞書』には次の頭注がある。

貫之伯瀬(泊瀬)へ年まいりをしたるに或時宿坊をかへてやどりたる時前ノ宿坊のかたより恨おこせたる時梅ノ枝を折て読ル歌也。

毎年の宿坊なれば故郷といへり。

細川幽斎の注を見てみよう。

永青文庫蔵『百人一首注』では『古今集』の詞書を記し、「貫之哥のなかにも余情かきりなき者也。此古郷といふはやとりつけたる所をさして云也」と評価する。「前か家集には少かはれり。古郷は久しくなりたる所と心得也」と古郷の意味が、地名ではなくなっている。

彰考館蔵『百人一首(幽斎抄)』では「童名阿古久曾云々玄蕃頭木工権頭従五位上御書所預」と紀貫之の童名が記される。

『紀氏系図』に貫之の童名を「内教坊阿古久曾」とあるから広まったのだらう。

注釈には「貫之宿坊に中絶して来りたるをあるし恨て如此やとりはかはらぬといへり」と宿坊説が登場する。また「余情かきりなき哥也」とやはり余情を重視する。さらに「故郷と云も常のにはいさ、か心かはれり。もとやとりつけたる所をさして云也。」という。

一華堂切臨の『切臨抄』は諸本から注を継承していて興味深い。

「今ノ世ニ泊瀬横田ノ坊ト云ハ貫之か宿坊也と云伝たり」と、中世から近世の頃、貫之の宿坊と伝承される場所が特定されている。祐海の『百人一首師説抄』では貫之の申し子説が登場する。

紀貫之 天慶比在世。大内記。後従五位上土佐守。御書所預。

或説紀ノ文幹ノ子ト云々。文幹大和泊瀬観音二月参り申シ子ニ参籠シケルニ経ヲ一卷玉ハルト夢ニミテ貫之ヲ生ケル。扱貫之モ長谷へ月参シケルト言説有。可尋之。故ニ童名内教坊ト号スト云々。詞書二人ノ家とハ貫之師匠の淨尊法橋也。古今混乱義ニアリ。紀ノ氏寺河内国西方院号紀寺。

後水尾院の『百人一首抄』にもこの話は記されている。

或秘抄ニ云、貫之ハ長谷寺ノ観音ノ申子也。故ニ長谷寺ニ月コトニマウツル也。父紀文幹(私云、此事不審、奥ニモ注ス)男子ノナキコトヲ歎テ、泊瀬ノ寺ニマウテケル時、夢ニ経ヲ給ハルト見テ後、貫之ヲ生リ。経ヲ給ハル故ニ内教坊ト童名ヲ云リ。人ノ家トハ淨尊法橋ノ家也ト云々。又或秘抄ニ、心カハラヌ我ヲ恨ルハ、其方ノ心ノ変スルカトカヘリテ疑心也。初瀬ハ雄略天皇ノ都也。文幹ハ紀長谷雄・淑光・文幹、此分也。貫之系図トハ事外相違也。貫之ハ持行男、系図歴然也。

後水尾院は諸説を集めつつ、系図などを検証し間違いを指摘するが、ここでは、そのまま「或秘抄ニ云、貫之ハ長谷寺ノ観音ノ申子也。故ニ長谷寺ニ月コトニマウツル也。」と書き記している。た

だし、『聞書』では

紀の長谷雄と云物は、はせの観音の利生を蒙た子細があつたによつて、はせの観音を信じた。此文幹か子しやと云説なれば、長谷雄のためには彦じや。貫之もはつせに度々参詣したそうな。

と、紀貫之ではなく、紀長谷雄の話をしている。紀長谷雄と長谷寺観音については、『長谷寺験記』に記されている。紀貫之の父が文幹という誤解があり、そこから長谷雄に繋がり、申し子伝承が間違つて継承されたものであろう。

ちなみに紀文幹は『拾遺和歌集』<sup>(注16)</sup>に一首だけ入集している人物である。

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風のうた

紀文幹

二 春霞たてるを見れば荒玉の年は山よりこゆるなりけり  
さて、地下に流布した『百人一首像讚抄』はどうであろう。(句讀点は稿者による)

系図友則の所に見えたり。ある説に紀文幹が子云々。童名阿古久曾云々。玄蕃頭 木工権頭 従五位上御書所預り  
この歌の注 詞書にはつせにまふでつることによたりける人の家に、ひさしくやとらでほどへてのちにいたりければ、かの家にあるし、かくさだかになんやとりはありといひ出して侍りければ、そこにたてりける梅の花をおりてよめるとあり。貫之家集にはむかしはつせにとあり。古今にはつ

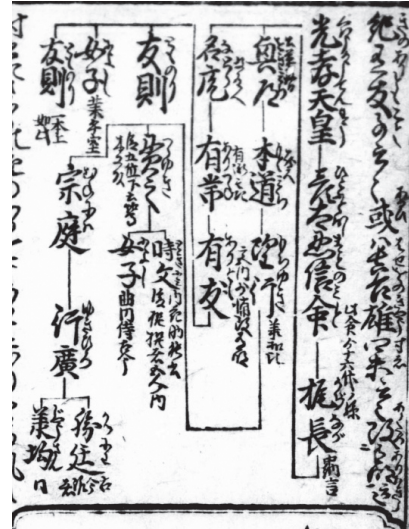
『百人一首像讚抄』 紀貫之<sup>(注17)</sup>

らゆき詞をなをして入たり。貫之宿坊に中断してきたりたるを、あるしうらみて、かくのことくのやとりはかはらぬと歌はの字つよくあたるこゝろ有。つらゆき久しくおとつれねは、あるじの心をいかゞとうたがひなから、はなはむかしの香に匂ひたるよし也。よく古郷を思ひ入て人はともかくもあれ、梅の匂ひをたのむと立り。然といへとも、人はいさといひてふるさとを思ふ心あり。よせいかりなき歌也。いさといふを近代不知と云るに連歌などにもちゆ。いさはかならずしらすとかくる詞也。連歌にも中には有へし。下にをく事はいか、と宗長などもいひしとなり。又古



紀友則(系図)

郷といふも常にはいいさる心かはりもはやとりつきたる所をさしていふ也。祇注に人の心はしらす花はむかしの香に



句ひけるそとうたかはしき下の句也と有。よくよく思慮すべし。

注釈の内容はこれまで見てきた内容を大きくは変わらない。うつむき加減の歌仙図が下段

右に、左に歌意図(梅の花を手に宿の主へ近づく貴族の姿)が描かれている。

描かれている人物は宿坊の僧侶とも見えない男性である。さて、この歌は男性に贈られたものであったらうか。

現代では、女性に向けて詠まれた歌と考えたほうがよいだろう。

片桐洋一氏は「言ひ出だして」の用例から「簾の中にいる女が外にいる男に言葉を伝えるのがふつうであることを思えば、この長谷の宿の主も女と考えるべきであろう。主が男であれば、貫之を出迎えるために、外に出ているはずであって、屋内から対応するとは考えられない」とする。

しかし、菱川師宣の描いた絵は、まさに「貫之を出迎えるために、外に出ている」情景であり、江戸時代当時の人々の解釈を示すようで興味深い。

「貫之の梅」

そこで、冒頭あげた狂歌にかえってみよう。

『家つと』(享保十四年刊)

梅

はつせ山小池の寺中より貫之の梅三枝(タ)給り歌をとありければ

梅はいか、思ふもしらず御懇意は初瀬山々香に匂ひけり

狂歌の作者鯛屋貞柳は、永田氏。通称善八。号は油煙齋、鳩杖子、珍菓亭など。大坂雛屋町にあった菓子舗鯛屋の主人であるが、父貞因は俳諧をよくし、弟は浄瑠璃作者紀海音。狂歌は豊蔵坊信

海に学び、その歌は狂歌撰集『後撰夷曲集』に十代で入集し、元祿（享保期（一六八八〜一七三六）の上方狂歌壇の第一人者でもあった。承応三年（一六五四）生、享保十九年（一七三四）没。

その貞柳には『百人一首』を本歌とした狂歌

わが宿は御堂の辰巳しかも角よう売れますと人はいふな  
り

が伝わるほか、宮中に菓子を納めた時にも望まれて狂歌を詠んでいる（『狂歌貞柳伝』）。この時期の狂歌というものは、贈答の折りに挨拶として詠まれたものも多い。

さて「梅はいか、」歌も、当然、紀貫之の「人はいさ」を本歌とした狂歌である。

梅はどのように思うか知りませんが、貴方の親切なお気持ちは初瀬山一面に梅の香りが広がるように、しみじみと感じたことですよの意。

（狂歌） 梅はいか、思ふもしらず御懇意は初瀬山々香に匂ひけり（本歌） 人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香ににほにける梅と人を対比し、本歌の「人の心はわからない」を「梅はどう思うかわからない」と読み換え、梅の花の送り主の気持ちはよくわかると御礼を述べた歌である。

送り主の「はつせ山小池の寺中」とは長谷寺小池坊のこと。『日本歴史地名大系』には次のようにまとめられている。

大講堂は寛文七年（一六六七）徳川家綱によって改築されたが、明治四四年の大火で焼失、大正一三年（一九二四）に再興された。これが本坊で、護摩堂・書院・庫裏などもある。

ここを小池坊とよぶのは、天正一（ママ）一年専誉の入山以来、前住の根来寺の小池坊にちなんでよんだものである。

小池坊とは、建物の名前であると同時に、専誉の号である。

醍醐寺三寶院の義演の『義演准后日記』慶長六年（一六〇二）二月十五日の条に次の文がある。（一部読みやすく書き下した）

泊瀬寺へ未刻著了。……（中略）泊瀬寺観音直に参詣、小池御迎に罷出了。先年一見の時は半作なり。今度は悉く周備、舞台は清水の如し。先年根来寺滅亡の時より、小池居住也。昔の僧は在家なり。仍て大納言（豊臣秀長）の時より真言宗六坊再興也。彼在家は二王門の外へ出られた。今に観音の事も知らざる体にて六坊として奉行せらる也。今夜小池坊に一宿了。

義演は小池坊（専誉）に迎えられ、宿泊した。以前来たときはまだ建築途中であったが、今や清水寺のように整っていたようである。

また、時代は下るが寛政三年（一七九二）刊『大和名所図会』長谷寺の稿には次のように記されている。

小池坊は、むかし紀州根来寺にありしに、天正十一（ママ）年、秀吉公根来寺破却の後、寺僧諸国に流浪し、智積院は京都に建、小池坊は此地に造立す。これ講堂と号す。

天正十三年（一五八五）、紀州根来寺は豊臣秀吉により炎上、根来寺小池坊で修学していた専誉は、高野山を経て、天正十六年（一五八八）長谷寺に入り、小池坊を再興した。専誉は慶長九年（一六〇四）五月五日、七十五歳で没する。以後、長谷寺小池坊は継承されていったということである。



長谷寺は天慶七年(九四四)火災により、堂塔・仏像が灰燼に帰している。また、天文五年(一五三六)の火災によって全ての建物が炎上し、衰微していた。義演が訪れた慶長六年(一六〇一)はちょうど、専譽が長谷寺に移り、寺院が整えられていった時期であろう。貞柳が小池坊とつきあいがあったのは専譽没後のことである。

とすると、「貫之の梅」も恐らくこの頃植えられた、または復活したものであろうか。

前出の『大和名所図会』には「貫之の梅」として、次の絵と解説がある。(句読点は稿者による)

(画賛) 古今 はつせにて梅を

人はいさ心もしらず古郷は花そむかしの香に匂ひける

宿からん花に暮なは貫之の 素堂

「貫之梅」(長谷寺回廊の中ほとにあり)紀貫之幼少のとき初瀬に住ける伯父の雲井坊浄真の方にて学文し、十四五歳にて都へ上り、朝廷へ仕へそののち雲井坊へ参られしに幼少の時植置し梅の枝を折て斯定宿在と浄真申されて梅を見せ給ふ時

(古今)

人はいさ心もしらず古郷は花そむかしの香に匂ひける 貫之

(貫之家集)

花たにもおなし色香に咲ものを植けん人の心しらなん 浄真

ここでは叔父雲井坊浄真が登場するが、絵を見ると、どう見ても

僧侶には見えない。

本居宣長が明和九年(一七七二)に旅したときに記した『菅笠日記』に「貫之の軒端の梅」と「雲井坂」が登場する。(傍線、濁点句読点は稿者による)

さて御堂にまゐらんとていでたつ。まづ門を入れて、くれはしをのぼらんとする所に、たがことかはしらねど、だうみやうの塔とて、右の方にあり。やゝのほりて、ひぢをる、所に、貫之の軒端の梅といふもあり。又蔵王堂産霊の神のほこらなんど、ならびたてり。こゝより上を、雲る坂といふとかや。かくて御堂にまゐりつきたるに、をりしも御帳か、げたるほどにて、いと大きな本尊の、きらきらうて見え給へる。人もをがめば、われもふしをがむ。

ここで、再び『大和名所図会』を見てみると、長谷寺の全体図の中に、「貫之の梅」が描かれている。

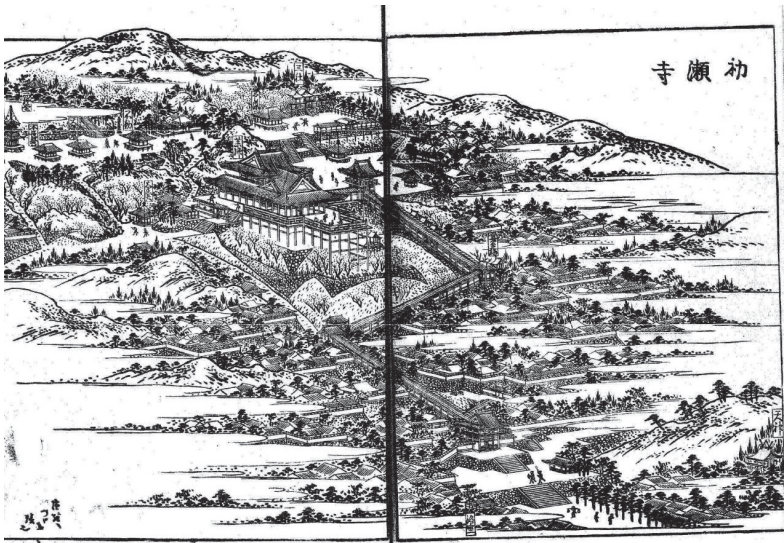
長谷寺が何度も焼亡にあつてゐることは前述の通りであるが、近世に復興していくうちに注釈をもとに新たな名所を作り出していった結果がこの「貫之の梅」であろう。

天保四年(一八三三)に刊行された、尾崎雅嘉『百人一首一夕話』<sup>(注25)</sup>は次のように断じてゐる。

貫之童名を内教坊阿古屎といひたる由河海抄に記され、また歌仙伝といふ書に貫之の父望行子なかりしかば初瀬の観音に詣でて子を祈られしに、夢中に経一卷を賜はると見てその妻懐妊してまうけたる子なり。それ故貫之も成人の後初瀬へ月詣でせられし事

にて、その由はこの百首の中の人はいさ心も知らずといふ歌の事書に、初瀬に詣づるごとに宿りける家に久しく宿らでなど書けるにて知るべしなどいひ、またその坊の名を雲井坊といひしなどいふ説々は、皆後世の推量にて抛り所確かならぬ事共なり。

(貫之の梅と初瀬寺全体図)



「皆後世の推量」とわかっていても、「人はいさ」歌は愛され、さまざまな想像をかき立てていった。

ちなみに、現在もこの「貫之の梅」は長谷寺にある。ところで、注釈にたびたび出てきた貫之の童名「あこくそ」だが、芭蕉の句に

あこくそその心もしらず梅の花

がある。「蕉翁句集草稿」に「此句は風麦子にて兼日会に句を乞ハれし時の吟也」と注記される。貞享五年(一六八八)のこの作は、幼少の頃からの友達である風麦を意識して貫之の童名とされる「あこくそ」を詠み込んだ句である。貫之は「人はいさ」と詠んだが、そんな心も知らず、故郷の人々も変わらずに温かく、梅の花は咲き続けているというもの。「三冊子」に「切字なくとも切る句有」るものの、その分別が難しいという話でこの九はあげられている。ある意味絶妙な組み合わせと言えるだろう。

まとめ

和歌研究は日々進展している。貫之の「人はいさ」歌は、

①なぜこの歌を定家は『百人一首』撰んだのか。



とができる。しかし、片桐洋一氏の屏風歌というイメージも興味深い。

①の問題として、吉海氏は、藤岡忠美氏の論(注27)をあげつつ、「人はいさ」歌は

『古今集』の詞書の束縛から解放し、一首の独立した詠歌(独詠)として中世的再解釈を行ったと考えたい。

菊池仁氏も藤岡氏と安東次男氏の論をあげつつ、

定家は、業平や小町に繋がるこの歌を、貫之としては珍しい「餘情妖艶の体」として評価したのである。

中世には中世の読みがあったように、近世には近世の読み方がある。

「余情」というキーワードから、さまざまな想像が膨らんだとも言えるだろう。観光名所「貫之の梅」はそうして生じた近世的楽しみの一つである。

②「ふるさと」とは初瀬か奈良か

③宿の主は男性か女性か  
ほかにも漢詩文との影響関係、貫之伝のことなどさまざまな問題点をはらみつつ、

順次論じられてきた。

前述の通り、この歌は初瀬の途次、奈良の女性に対し詠まれた歌と解釈するこ

近世における当該歌の享受という点を考えるとき、間違っているかと当時はこのように読んで、議論し合うことから考証学にながったともいえる。

いつ頃どのような仮説(伝承)が生じたのか。間違いと断じることなく積み重ね整理するのも考証学のおもしろさと言えるだろう。

《注》

- 1 鳥津忠夫氏『新版 百人一首』(平成十一年 角川書店)
- 2 『新編国歌大観』(昭和五十八年 角川書店)底本、定家自筆本系統伊達家旧蔵本による。番号は国歌大観番号。
- 3 『新編国歌大観』(平成三年 角川書店)
- 4 井上宗雄氏『百人一首を楽しくよむ』(平成十五年 笠間書院)
- 5 前出。鳥津忠夫氏『新版 百人一首』(平成十一年 角川書店)
- 6 渡辺輝道氏「空間—みやこ—ふるさと—」『小倉百人一首の言語空間』(平成元年 世界思想社)
- 7 吉海直人氏『百人一首の新考察』(平成五年 世界思想社)
- 8 有吉保・位藤邦生・長谷完治・赤瀬知子編『百人一首注釈書叢刊 百人一首頼常問書 百人一首経厚抄 百人一首問書』(天理本・京大本)『平成七年 和泉書院』
- 9 右に同じ。
- 10 荒木尚氏編『百人一首注釈書叢刊 百人一首注・百人一首(幽斎抄)』(平成三年 和泉書院)
- 11 右に同じ。
- 12 『群書類従』第五輯(昭和三十五年 統群書類従完成会)
- 13 田尻嘉信氏編『百人一首注釈書叢刊 百人一首切臨抄』(平成十一年 和泉書院)
- 14 泉紀子氏・乾安代氏編『百人一首注釈書叢刊 百人一首師説抄』(平成五年 和泉書院)

- 15 島津忠夫氏・田中隆裕氏編『百人一首注釈書叢刊 後水尾天皇百人一首抄』  
(平成六年 和泉書院)
- 16 『新編国歌大観』(昭和五十八年 角川書店)
- 17 『百人一首像讃抄』国文学研究資料館蔵  
<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/200007761>
- 18 片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』(平成十年 講談社)
- 19 『狂歌大観』(昭和五十八年 明治書院)
- 20 『狂歌貞柳伝』『三井文庫論叢』十三号(昭和五十四年 三井文庫)
- 21 『日本地名大系』(平成十六年 平凡社)
- 22 『史料纂集 古記録編 義演准后日記』(昭和五十九年 続群書類従完成会)
- 23 『大和名所図会』国文学研究資料館蔵  
<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/200000654/viewer/1>
- 24 『菅笠日記』国文学研究資料館蔵  
[http://base1.nijl.ac.jp/info/lib/meta\\_pub/CsvSearch.cgi](http://base1.nijl.ac.jp/info/lib/meta_pub/CsvSearch.cgi)
- 25 『本居宣長全集』第十八卷(平成二年 筑摩書房)
- 25 古川久校訂『百人一首一夕話』(昭和四十七年 岩波書店 岩波文庫)
- 26 『俳文学大系 芭蕉集 発句編』(昭和五十二年 集英社)
- 27 藤岡忠美氏「貫之の贈答歌と屏風歌―「人はいさ心もしらず……」の一首をめぐって」『文学』第四十三巻八号(昭和五十年 岩波書店)
- 28 菊池仁氏「百人一首に採られた古今集歌」『国学院大学院文学研究科論集』  
四号(昭和五十二年)
- 29 安東次男氏『百首通見』(昭和四十八年 集英社、平成一四年 筑摩書房  
ちくま学芸文庫)

— おおうち みずえ・文学部非常勤講師 —